



### 古典を読む

近頃、ひよんなきっかけでドン・キホーテを再読した。いや、読んでいるところ、といったほうが正確である。なにしろ長大であるし、とてつもない話が延々と続くので、とても短時間で読み切ることはできない。だいたい、序文ののっけから「おひまな読者よ。(岩波文庫版)」で始まるのだ。この皮肉を楽しめる人しか読む資格はないと言わんばかりである。しかし壮大な、とんでもない小説でありながら、なぜか読み続けたいくなる不思議な力を感じ、やめることができなくなっている。これが古典の力なのかもしれない。そんなことを考えているうちに、今度はサイエンス論文の古典を読みたくなった。

論文をたくさん読まれる方でも、昔の、しかも内容をよく知っている論文を日常的に多く読まれる方は少ないと思う。大概是、新しい論文に魅力や好奇心を感じて、という動機で読む論文を選んでいのではないだろうか。そもそも論文は芸術作品とは異なり、新規の事象を報告し合い、もって科学を進展させる、という大目的がある。だから内容の新規性は何にもまして重要であり、教科書に載っているような事実を証明した昔の論文は、自分の研究にとって必要でない限り、あまり読むことはない。だから、万人にとって「古典」と呼ばれるような論文は存在しないのかもしれない。しかし、サイエンスをやっていると、いつのまにか「マイ古典」ともいえる論文ができてくる。それは学生時代に読んで感動した論文だったり、自分の専門分野のマイルストーン的論文だったりする。そんな論文のひとつを、懐かしく読み返してみた。

久しぶりに読むというのは面白いもので、内容を知って

いるような、知らないような、不思議な感じなのだが、それでいて初めて読んだときのように感動を覚えた。論文のだいたいの結論は、頭の悪い筆者でもさすがに覚えている。それにもかかわらず何が感動を呼ぶのかと考えてみると、それは論文が示している内容というよりも、論文筆者の人間としての大きさのような気がしてきた。なにも人間的に優れていると感じているわけではない。優れた論文を書くには、大きな仕事を成し遂げる気力や体力が必要であり、それが自ずと論文自体ににじみ出ているのが、感動をよんでいるような気がするのである。これは、偉大な芸術作品に触れたときと同質の感動であり、ピカソの大作やワーグナーの長大なオペラに触れたときの、圧倒されるような感覚に近い。だから短絡的な見方をすれば、サイエンスとは関係が無い感動であり、論文に必要な要素ではないのかもしれない。しかし、サイエンスが人間の知的活動である以上、論文に人間の底力がでるのは当然のことであり、こうした力が感じられるような論文を書きたいと、読後、心底願った。

ところで、冒頭でひよんなきっかけで、と書いた。それが何かというと、学生がドン・キホーテの話をしてきたからである。なんと、彼らにとってこの名前は小説名ではなく、量販店の名前ではない。留学生（断っておくがセルバンテスの故郷スペイン出身ではない）が「それは小説の名前ですよ？」と聞いたのに対して、日本人学生はそんな小説は知らないとのたまっていた。こちらはそれを耳にして、顎が外れるほど驚いた。最高学府の学生の教養も、今やこんなものである。こんな学生たちと、未来の読者に「感動した」と言ってもらう論文を書くには、まだまだ日常の教育でやらなくてはいけないことが多そうである。まずは、力強い良質な論文をたくさん読んでもらい、それがどんなにすごいかを分かるまでたくさんの実験をして、たくさん失敗や少しの成功を実体験してもらおうところかな、と思う毎日である。

(東風)